2022 年 3 月 14 日

COC 奨励研究

「筑豊の子供を守る会」関係資料集成の刊行に向けて

共同研究代表　　細井勇
共同研究分担者　鬼塚香、堤圭史郎、佐野麻由子、陸麗君、杉野寿子

2021 年度の活動報告

2021 年 8 月中	「筑豊の子供を守る会」関係資料の目録作り
8 月 31 日、9 月 1 日	六花出版（山本）と収録資料の第一次選定 （複写作業に入る）
11 月 14 日、15 日	山梨県大月に「守る会」の創設者舩戸良隆氏を訪問、 黒沼宏一氏（静岡市在住）同席。 「守る」会創設期の資料と福吉炭住の資料を補充する。
12 月末	資料の編集方針の確定と収録資料の第 2 次選定作業
12 月 28 日	資料の編集方針に関する研究会開催
2022 年 2 月 3 日	六花出版と関係者と ZOOM 会議 収録資料の最終確認を行う。 全体を 6 項目で編集し、全 7 巻とすることを決定。
2 月中	「写真」の扱い、手記資料の扱いを関係者と確認する。
2 月 18 日	公開講座「紙芝居を通じて見る筑豊の歴史」をオンラインで開催（細井勇・大西宏幸）。
2 月～3 月	解説の執筆（細井勇・鬼塚香）、活動地一覧の作成。

2022 年度活動計画

4 月	研究会及び伏せ字の編集作業を予定。
5 月	第 1 期刊行（第 1 巻～第 3 巻）
11 月	第 II 期刊行（第 4 巻～第 7 巻）
11 月	出版記念会を開催予定。

「筑豊の子供を守る会」関係資料集成 全７巻の構成

１．「筑豊の子供を守る会」発足からその解散まで

（１）「筑豊の子供を守る会」の発足とその背景

（２）「守る会」の活動内容と各大学チームの活動地区一覧

（３）「守る会」の綱領

（４）「守る会」の中央組織の解散

２．福吉炭住での活動

（１）船戸良隆による福吉炭住での活動

（２）筑豊キリスト者兄弟団の活動

（３）犬養光博による福吉伝道所の活動

３．鞍手友愛更生会と鞍手町新延地区での活動

４．筑豊協力伝道奉仕会の活動

５．炭鉱犠牲者復権の塔

６．筑豊における県福祉事務所の活動

※今回の報告では１（１）～（４）、２（１）～（２）を中心に行いたい。

１－（１）　「筑豊の子供を守る会」の発足とその背景

1959 年という年は、福岡県が「黒い羽根運動」を始めた年であり、それを契機として筑豊における中小炭鉱の閉山の問題が全国的に注目されるようになった年であった。すなわち、59 年 4 月の知事選挙で鵜崎多一革新県政が誕生する。同年 7 月発表された福岡県政会編『炭鉱離職者の生活実態－何をどうして食べていけるか』は衝撃的内容であり、それを契機に 8 月に「黒い羽根運動」が起きる。緊急の救援活動とそのための「黒い羽根」による募金活動であったが、石炭の合理化政策の問題を世に知らしめようとする政治運動でもあった。そこから 12 月に炭鉱離職者臨時措置法が成立、施行されていく。

当時、日本キリスト教奉仕団は、アメリカの諸教会から送られた小麦粉やミルクなどの救援物資を筑豊に送って、黒い羽根運動に協力した。筑豊の炭鉱閉山に伴う欠食児童問題に応えようとしていったのである。

東京神学大学の学生であった船戸良隆は、日本キリスト教奉仕団による救援活動を知ることになり、1960 年 2 月 2 日から 2 月 5 日まで、吉祥寺の駅前で募金活動を展開した。土門拳の写真集『筑豊の子どもたち』を携えての募金活動であった。船戸は 1960 年 3 月、日本キリスト教奉仕団による救援活動に参加する形で初めて筑豊を訪れることになった。ここで船戸は、筑豊が必要としているのは救援物資ではなく、人である、という認識に至ることになった。そこには黒い羽根運動を乗り越えようとする問題意識があった。大之浦教会牧師服部団次郎らによって結成されていた**筑豊キリスト教連合救援委員会**は、船戸に対し、夏休みを利用して学生達が炭住の子ども達のために子ども会活動を展開してくれるとありがたい、と進言した。そうした経緯から船戸は東京のミッション系大学に働きかけ、夏休みを利用してキャラバン隊を派遣することしたのである。

すなわち、1960 年 8 月 1 日から 21 日までの 3 週間、東京神学大学（東京女子大学のメンバーを含む）、立教大学、ICU（国際基督教大学）、明治学院大学のそれぞれのチーム、全体で 56 人の学生が、日本キリスト教奉仕団の、言い換えれば黒い羽根運動の運動形式を継承する形で、一週間ずつ各炭住を回り、ミルク給食などの救援活動を実施しつつ、人形劇、紙芝居、幻燈等の遊びの空間を用意していったのである。これが、実質上のキャラバンの発足であった。

1960 年 9 月 17 日に、キャラバンの合同反省会を ICU で行い、連絡委員会を設けることを決定した。1961 年 2 月 13 日には連絡委員会を開催、会の名称を「筑豊の子供を守る会」とすることを正式決定した。また役員を決定し、委員長船戸良隆が決定した。「守る会」は、同年 4 月、機関誌「さきやま」創刊号を発行した。

１－（２）「守る会」の活動内容と各大学チームの活動地区

資料及び写真

写真①　土門拳の写真集『筑豊の子どもたち』を掲げて吉祥寺の駅前での募金活動
炭鉱の子どもたちにパンを送ろう!!

写真②　　筑豊キリスト教連合救援委員会によるミルクの配給（1960 年夏）

写真③　筑豊に子ども文庫をつくろう！（1961 年 3 月）

写真④　紙芝居とおはなし

1961 年、東京神学大学と東京女子大の混成チームの夏季キャラバンの例

各大学チームの活動地一覧

１－（３）　「守る会」の綱領（1963 年決定）

「守る会」の 2 年目から同志社大学、関西学院大学、青山学院大学、熊本大学が参加した。参加する大学が増えていくこともあって、「守る会」の綱領作成が 1962 年度検討され、1963 年の夏、以下のように決定した。

一、筑豊地域諸炭坑の閉山による最大の犠牲者は、児童である。ゆえに、児童を私達の奉仕の中心的対象とし、人格的交わりを通して児童の健全な成長をはかるべく、これを私たちは、彼らの両親とともに、衷心より私たちのことがらとして考え、実践していくものである。

一、筑豊地域諸炭坑の閉山により放出された失業坑夫は、疎外された群集としての姿を顕著に現わした。
これは、日本の現代社会構造が資本の利潤追求のために、人間を手段としているからである。
この事態の、私たちは抵抗し本来的人間の回復をめざすものである。

一. 筑豊の閉山炭坑地域への実践的奉仕活動に、私たちを押し出してきた力は、イエス・キリストの愛である。
私たちは、聖書から福音を正しく受け止め、人間の罪を根源にもつゆがんだ社会状況の中で、責任あるものとして行動し、よりよい社会形成のために努力するものである。
かくあることが私たちの使命と確信する。

1964 年中央委員会の活動方針

1964 年度には中央委員会が発足した、その活動方針は以下の通りである。キリスト教主義の奉仕活動として開始された「守る会」の活動は社会運動化していった。

１．運動主体に対する不断の内面的求心的探求－運動体験の理論化
２．筑豊の現状変革
３．科学的　方法論の提起

１－（４）　「守る会」の中央組織の解散

1966年度の第6代委員長は桜井秀教であった。桜井は東京神学大学大学の1年のときに、山本将信の勧めで1964年夏のキャラバンに参加し、はやくも「キャラバン報告」の編集人になっている。

1966年6月の「さきやま」18号で、桜井は委員長として「現情況の凝視を！」を書いている。そこでの強調点は以下の点にあった。「筑豊がある種の問題性をもつことは即自分が筑豊に赴くことにはなり得ない。我々が如何に生き、如何に生くべきかが厳しく問われることなしに自己の問題とは決っしてなり得ない」。

「守る会」の機関誌「さきやま」は20号（66年10月）が最後となった。そしてついに1967年3月の全国常任委員会（於飯塚市の八木山青年の家）において桜井委員長の下で全国組織としてのキャラバンは解散することが決定されたのである。

振り返ってみれば、1960年頃と1965～66年頃では時代状況は大きく変化していた。1960年頃、筑豊の中小炭鉱を襲った集中的な炭鉱閉山に伴う劇的な生活困窮が学生達の目の前にあった筑豊の現実であった。しかし、1963年頃から生活保護受給が普及し、表面的には筑豊は落ちついてきているような様相を呈していった。筑豊は地域的に生活保護に深く依存することになっていったのである。

1960年代末は、学園紛争の時代であり、とりわけ1969年は全共闘運動の時代であった。こうした時代背景もあって学生達の社会問題への社会科学的分析は資本主義批判としてより先鋭化していくことになったといえよう。それはキリスト教的福音運動の限界を告発する姿勢の先鋭化であった。こうした動きを代表していたのが九州大学の佐藤誠であり、第6代委員長の桜井秀教であったといえよう。しかし、その一方で、大学によっては（東洋英和、関西学院、聖和女子、熊本大学）、「守る会」の活動はどこまでもキリスト教主義に基づく奉仕活動であった。両者の溝は深くなり、妥協できない事態となっていったのである。

桜井は碑文谷創の名で『キリスト教界と東神大闘争　碑文谷創全発言録』（論創社、2012年）を著している。本書の中で桜井（碑文谷）は、1970年時点での文章であるが、4年前の全国委員長時代＝筑豊時代を振り返り、在日朝鮮人への差別の問題に触れた後、以下のように書いている。

「問題がない自分が問題のある筑豊へ、というのでは駄目で、徹頭徹尾自らをこそ変革止揚しなければならないということでした。……余地をもった運動は自らの手で解体しなければならないと考えて運動に終止符をうったのです。僕の小さな運動は挫折したのです。僕は今もなお、その挫折を引きずっています。でも闘いの視点だけは手にしたような気がします。（70年11月のノートより）」（p167）。

２．福吉炭住での活動

２－（１）船戸良隆による福吉炭住での活動

こうした「筑豊の子供も守る会」の分裂と解散の経緯の中で、それと並行して独自の展開があった。筑豊が必要としているのは救援物資ではなく人であると認識していた船戸にとって、学生達による夏休みを利用したボランティア活動の限界を感じないわけにはいかなかった。そこで、船戸は 1962 年 4 月からキャラバンの活動地でもあった金田町の旧福吉炭鉱の炭住に 1 年間居住することにした。このとき、顧問であった隅谷三喜男の勧めで、阿部志郎が館長を務めている横須賀キリスト教社会館で実習している。福吉炭坑は、炭坑主の名から矢頭炭坑とも呼ばれるが、1960 年の夏のキャラバンから東京神学大学と東京女子大の混成チームが活動した炭住（約 90 世帯 400 人、保護率 80%）であった。船戸は、1 年間の福吉炭住への滞在を通じて、こども会、その親の会である育成会を新たに結成し、長欠児問題に取り組み、子ども文庫を設置し、青年団を起こし、集会所（公民館）の建設に向け取組んでいったのである。

1962 年の秋に、船戸良隆（東京神学大学院 2 年）、犬養光博（同志社院 1 年）、松崎一（関西学院 4 年）、服部清志（同志社院 2 年）らによって、仮称「筑豊基督者兄弟団」が構想された。船戸による福吉での 1 年間滞在は、犬養と松崎によって継承されることになった。そこで、学生による自主的な活動としての「守る会」の活動を支えるような地元における拠点づくりを志向したといえよう。同時に、筑豊における伝道の拠点づくりの志向でもあった。

船戸は地域づくりの拠点として集会所（公民館）の建設運動に着手し、1963 年 3 月に完成した。集会所とは元の炭鉱事務所（建坪 33 坪）を 9 万円で買い入れ、一部を改装したものであり、管理人室が船戸を引き継ぐ犬養光博と松崎一のために用意された。

２－（２）．筑豊キリスト者兄弟団の活動

1963 年 4 月からは船戸に代わって犬養光博と松崎一が一年間福吉に滞在することになり、新たに開設された集会所に住み込むことになった。

犬養らは、さっそく「筑豊キリスト者兄弟団」という名称で『週刊福吉』を発刊した。この時期から「筑豊キリスト者兄弟団」の担い手は犬養と松崎となっていく。同志社神学部院を修了した服部清志は、1963 年 4 月から鞍手町新延（保護率 70%、長欠児童が多かった）で独自の活動をしていくことになる。

福吉の集会所が活動拠点となったことで、「守る会」としての 2 週間の福吉炭住へのキャラバン活動は 1963 年夏からは実施されないことになった。

福吉及び旧金田町の青年団のねがいは地元に生業の場をつくることであった。そこで「筑豊キリスト者兄弟団」（犬養光博、松崎一）は、1963 年 5 月から地域（旧金田町）の青年たちのための仕事起こしとして養鶏事業を構想し、金田町町長にも働きかけ、寄付金募集に着手していった。中卒後郷里を離れて関東や関西等に就職しても、そこでの冷遇と孤立から挫折して帰郷する青年が少なくなかったからである。寄付金募集のため松崎一と大塚勲次は関東や関西の日本キリスト教団の教会関係者を訪問し、協力を求めていった。63 年 7 月に「兄弟団」は金田町町長らを協力者として「再び筑豊に愛の手を!!　離職者による共同養鶏計画趣意書」を発表し、200 万円の募金を行っていった。同年 8 月 4 日に、「筑豊兄弟社」という青年団とは区別される組織を立ち上げて共同養鶏所の開所式を行っている。「兄弟社」とは大塚を含む 5 名の青年からなり、犬養と松崎はその世話役となった。開所式には、「守る会」の顧問隅谷三喜男や船戸良隆も来てくれたようである。

1964 年 4 月からは、東京神学大学大学院 1 年の山本将信が犬養らを引き継いで福吉での 1 年間滞在を開始し、「筑豊キリスト者兄弟団」（山本将信）としての『週刊福吉』の刊行を継続していった。1963 年度の「守る会」の第 3 代委員長であった山本は、後任に黒沼宏一を指名して福吉での 1 年間滞在を決意したのである。西南学院大学の山下信治が後半から福吉に入っている。

「筑豊キリスト者兄弟団」としての中心的な事業であった養鶏事業は、卵の価格の急落によりどこまでも赤字続きで、養鶏事業はしだいに行き詰まっていった。

1965 年 4 月からは、同志社の大学院を修了した犬養光博が、永住覚悟で福吉に戻り、福吉伝道所を開設し、『月刊福吉』を新たに創刊していった。犬養は「筑豊キリスト者兄弟団」を解散し、『週刊福吉』を廃刊とし、あらたに伝道のための機関誌として『月刊福吉』を発

写真で見る船戸良隆及び筑豊キリスト者兄弟団の活動

写真⑤　福吉炭住で開設された集会所
私の送別会を兼ねて「福吉公民館の開所式が行われた。

写真⑥　上京してきた筑豊出身者の声援たちを集めて会を組織、
時々ピクニックなどに出かけた。

写真⑦　「筑豊キリスト者兄弟団」の中心事業としての養鶏事業
福吉の青年たちと共同養鶏所

関係者への謝意

今回の研究報告ないし、「守る会」関係資料集成の刊行計画においては、以下の関係者に特別のご支援をいただきましたので記して感謝申し上げます。

船戸良隆氏（「守る会」第 1 代委員長、創立期の「守る会」の資料提供）
犬養光博氏（2 年目の「守る会」の活動に参加、1965 年福吉伝道所開設）
黒沼宏一氏（「守る会」第 4 代委員長、「守る会」関係資料の提供）
桜井秀教氏（「守る会」第 6 代委員長）
牧村元太郎牧師（元宮田教会牧師、服部団次郎関係資料の提供）
大西広幸氏（2022 年 2 月 18 日の公開講座で、紙芝居「筑豊一代」を上演）
城島泰伸氏（元福岡県職員労働組合福祉職能会長、嘉穂福祉事務所有志による機関誌「川筋」の提供）